

命をつなく
小児がん

治療の

現場から

「学 校に行かれへんの？」小児がんであることを告げられた子どもたちが心配そうな顔で私に尋ねます。

大人たちは驚くのですが、治療のために長期入院することが決まった子どもたちの最大の関心事は、「がん」のことよりも、慣れ親しんだ学校に行けなくなる事なのです。そんな子どもたちのために、入院中も通える学校、「院内学級」が存在します。

院内学級は、入院中の子どもたちの勉強が遅れないようにするためのだけの場所ではありません。小学校、中学校に準ずる教育を施すとともに、「障害」による学習上または生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授けること」を目的とされた「特別支援学級」なのです。そして教育者だけでなく、医療者も、子どもたちががんを克服するのを支援するための教育的努力を行うように養成されています。

院内学級に通う他の病気の子どもたちとの出会いも、前向きに治療を受ける原動力の一つにしながら、小児がんの子どもたちは来るべき退院、原籍校(元の学校)に通う復学へむか(く)に備えます。それでも入院期間中、子どもたちはいつか戻る原籍校に「自分の

医療者と教育者が連携し 子どもが困難克服し自立する力をつける

居場所」があるかに不安を感じる事がよくあります。私のご事を覚えていくれるかなあ、またみんななど仲良くできるかなあと。このため院内学級と原籍校の教師は互いに連携し、メッセージシートやビデオ通信を用いて、原籍校のクラスメートとの交流が途絶えることがないように努めます。

そして退院が決まったら、子ども家族、院内学級と原籍校の教師、そして医療チームで話し合いの場を持ち、健康を維持しながら退院後の学校生活がスムーズに進むよう環境を整えます。治療による抜け毛、肥満や痩せ、体力低下、活動制限そして頻回の通院など、他とは違うことであふれているのも事実です。つらさを感じるクラスメートからの突然の質問にもおびえず答えられるように、時にはシミュレーションしたりします。

私たち医療者は、子どもたちが成長と発達の過程で直面する種々の困難を克服し、幸せな人生を手に入れることを使命としています。退院おめでとう！頑張ってくれてありがとう。あなたは強くなったよ、自信をもって学校へ行った方がいいんだよ。

